

「信徒のためのジェンダーとパワー」

日本福音ルーテル教会・LWF/WICAS 協力委員会 発行

(日本語版編集者から)

ジェンダーとは、《社会的文化的な性のありよう》のことを言います。

「夫が外で仕事をし、妻は家を守る」「男は人前で涙を見せない」

「化粧は女がするもので男はしない」「女性は教会の集会では男性をたて、黙っているべきだ」

これらはすべてジェンダーにかかわることです。

男はこういうもので、女はこういうものであると、社会や文化がつくっている

《性のありよう》をジェンダーと言います。



パワーとは、《ちから》のことです。権力や威力など、権威を伴う《ちから》の意味合いで使われます。

第1回 はじめに (2012年2月)

「私たちのめざすジェンダー公正—ルーテル世界連盟の取り組み」



神はご自分にかたどって人を創造された。
神にかたどって創造された。男と女に創造された。
創世記1：27 (新共同訳)

「すべての教会が、ジェンダーについて、パワーとの関係で見なければならない」



「ジェンダー」という言葉の意味がよくわからないと思っている人は多いでしょう。ジェンダーとはなんとなく女性に関係することだと誤解している人がいまだに大勢いるようです。

女性のために、女性について、女性たちがやっているもの、という誤解です。また、ジェンダー問題よりも、もっと生命を脅かす問題の方を優先するべきだと考えている人もいます。たとえば紛争や戦争、貧困、HIV・エイズ、テロ、気候変動、水不足、経済不況など、世界を揺るがし、私たちが不安と恐怖の悪循環の渦に巻き込んでいる問題の数々のことです。ところが、「なぜ」このようなことが起きているのか、その背景を知るために、また、諸問題に効果的に対処していくために、実は「ジェンダー」という概念が問題分析のツールになるのです。ジェンダーを切り口にするによって、多くの問題に取り組んでいくことができるのです。

ジェンダーとパワー。どちらも複雑な概念であり、わかりにくいのはもちろんのこと、その関係をきちんと解明していくのは相当な困難を伴います。ひとつひとつのテーマや問題をジェンダーの視点から分析できないか考えることから始めましょう。たとえば、

「このことは女性にとってどんな意味があるのか」

「女性はどうのように無力化されるのか」

「女性の関心・経験・専門知識を生かすには

どのようにすればよいか」などの質問をしてみるのです。

また、「これは男性や社会にどのような影響を与えるのか」も合わせて問います。

2009年の国連女性の地位委員会 (CSW 53) で、エキュメニカル・ウィメンズ・ネットワークがHIV・エイズ患者の世話についての調査結果を発表しました。「患者の世話や看取りをおこなう人の90%が女性であるという事実から、世

「信徒のためのジェンダーとパワー」

第1回 はじめに (2012年2月)

「私たちのめざすジェンダー公正—ルーテル世界連盟の取り組み」

世界中の国でも、この責任分担に男女の不平等があることは明らかです。何百万人の人々が死の床にあるとき、そのかたわらにいるのは女性たちです。病人に寄り添うという慈愛の行為に専念する女性たちは、日常生活に負担がかかり、こどもたちへの世話も困難になりがちで、貧困と無力が循環していく悲劇を生み出します。

エキュメニカル・ウィメンズ・ネットワークは、次のような提言をしました。「パワーとジェンダー役割の問題が女性たちを無力化したという現実を直視したうえで、エイズに対処するための大胆で創造的なアプローチが強く求められます。女性が犠牲にならないよう、ジェンダー平等を実現すべきです。私たちは、信仰者の組織として、ジェンダー役割と責任の再定義に向かって努力する環境をつくりあげていく役割があると認識しています。」

ジェンダーを方法論的なツールとして用いることにより、生物学的な性差に基づいている力関係の格差を浮き彫りにすることができます。市民の権利を擁護する政策や方針の策定にもおおいに役立ち、不公正な社会構造を変革して、すべての人間が平等に参画できる環境づくりの促進につながります。

ここで、ルーテル世界連盟の近年の総会から、ジェンダー関連の活動について見てみましょう。ジェンダーが、連盟にとって議論と行動の最優先事項の一つであることが明らかになったのは、1997年の第9回および2003年の第10回総会で出された委員会付託からです。連盟は宗教組織ですから、ジェンダーについては、単に世俗的・社会的な女性差別問題として人権意識の視野から見ることにとどまらず、信仰に関わる問題として、事務局レベルと加盟する諸教会および各地域レベルの活動へとつながるよう対処する必要があります。

ここからさまざまな成果が生まれています。たとえば、連盟の総会は「参加者の40%が男性、40%が女性、20%が青年」という方針があります。困難はあるものの、あらゆる障害を乗り越えてこれを実現するための努力が事務局によってなされています。連盟の常任委員会では、構成人員の40%が女性、10%が青年女性です。また、さまざまな委員会が男性と女性と青年で構成されますが、女性あるいは青年女性が委員長になる機会が保障されています。



現状はどうか

ジェンダー・ウォッチをすることや、ジェンダー方針を推し進めていくことは、ルーテル世界連盟の宣教/開発局(DMD)および社会奉仕局(DWS)にとって重要な作業項目になっています。すべてのスタッフにジェンダー説明責任があります。ただ、いろいろなジェンダー方針があっても、ときとして見過ごされたり無視されたりする場合があります。女性リーダーを立てることや、各教会から女性を代表として選出してもらうことに困難があり、女性たち自身が、「自分には専門知識が足りない」と感じるという障害も起こります。このような時、宣教/開発局は、「教会と社会における女性」部であるウィカス(WICAS: Women In Church And Society)の協力を求めることができます。

ジェンダー教育、ジェンダー・インプット、支援運動、

参画とリーダーシップにおける平等についてルーテル世界連盟事務局が力を入れて進めるなか、各加盟教会では、下記の項目を継続的に促進することが望ましいと思われます。

- ・女性も男性も神にかたどって創られており、創造された全世界の管理者として男女ともに平等な責任があることを心に刻みつつ、その恵みを喜び、すべてを慈しみ養う。
- ・私たちは洗礼を通して、女性であろうと男性であろうと、また、若者もこどもたちも区別無く、平等に交わりに招かれていることを理解する。
- ・聖霊はすべての人にふりそそぎ、私たちに励まし、強めることを確信する。
- ・信仰による義認の教義が恵みに満ちた神の招きであることに信頼し、老若男女すべての人が対象であり、誰一人として排除されていないことを信じる。

「信徒のためのジェンダーとパワー」

第1回 はじめに (2012年2月)

「私たちのめざすジェンダー公正—ルーテル世界連盟の取り組み」



ルーテル世界連盟は、提唱と支援の活動を長い間積み重ね、女性の参画の保障・女性リーダーの擁立・ジェンダーを議題に取り入れることから始めた初期の段階を過ぎ、今は各所にジェンダー説明責任を要請する段階にきています。まだまだ大変な労力を伴う困難な作業です。方向性を示し、再認識の機会を与え、組織間で互いに説明責任が果たせるよう、協力を継続することが重要な課題となっています。事務局内部でこの目標を達成するためには、加盟教会や意志決定機関が常にジェンダー意識を忘れないよう、新しいスタッフが就任するたびに再確認することが必須です。

最近の連盟総会の主要な成果として、「コミュニオン」という概念があります。(訳注:「聖餐式」という意味もあるが、「共同体」と訳されるコミュニティと対比して、コミュニオンは「主キリストにある信仰者の交わり」という意味合いで用いられる。)ほんとうの意味で「すべての人々が招かれる食卓の交わり」となるよう広げていくことが、連盟のあり方を支え、その活動の指針となります。

あらゆる問題にジェンダー次元があり、どこに強調点を置くのか見極める必要があります。つまり、ジェンダーの違いを考慮して対処するという事です。単に女性の参加者を加算することによって数字上で平等の機会やリーダーの役割を与えるのは、形式的な名ばかりの「平等」になる恐れがあるので、良い方法ではありません。また、すべての女性がジェンダー意識を持っていると考えたり、機械的にジェンダー平等に賛成するものだと仮定したりするのは誤りです。

たいへん優秀な若い女性神学者の例をあげましょう。博士課程の研究にジェンダーをテーマにしたらどうかと勧められた彼女は、これを拒否しました。ジェンダーを論じると、実力が割り引いて見られてしまうので、神学者としてまともな評価を得られなくなるというのが理由でした。現実を見据えた率直な意見でしたが、すべての女性が高いジェンダー意識を持ってジェンダー問題に常に積極的に取り組もうとしているわけではないことを、この一件は明らかにしています。

ジェンダー公正は、おわりなく続くものです。監査と評価を長い間継続しておこない、立ち止まってしまうことのないよう、保護すべき連続体として見るべきです。たとえば、按手を受けた女性教師の境遇を注意深く見守っていく必要があります。召命を受けて奉仕する教会が与えられたか、男性教師と同額の報酬を得ているか、男性と同等に尊重されているか、僻地への転任を強いられていないか、昇進や昇格について差別が無いかなどをチェックすることが大切です。

パワーとジェンダーを合わせて分析すると、状況を読み解いていくための手がかりを得ることができます。これにより、ジェンダー概念についていろいろな人がもっている立場の違いを理解し、効果的に対処することができます。さまざまなキリスト教会の女性信徒からなる集まりの中で分析をしてみると、女性の教会活動と仕事をどのように見るかという点で、大きく三つのグループに分かれます。一つは、フェミニスト神学者や女性開放運動のパイオニアとみなされる女性たちのグループで、彼女たちは「フェミニズム」という言葉を手放したくないので「ジェンダー」と言うのを拒否します。「ジェンダー」は生ぬるい妥協案だと考える人たちで



ある女性リーダーが「ジェンダー概念って女性の向上を目指す運動にとっては睡眠薬よ!」と、歯に衣着せぬ表現をしました。第二のグループは、自分たちの身近で起きた女性解放運動(フェミニズム)が周囲から間違っただけで受け止められ、それがある程度の弊害をもたらしたことを学習し、運動には参加したくないと思っている女性たちです。いろいろなことを女性と男性と一緒にやればいい、という中道路線を行きたいと望む人たちです。三つ目のグループは、女性解放運動などはもう時代遅れだと考え、リーダーになるにはひとりひとりが自主的に頑張ればよいとする女性たちです。このタイプには、自分たちが今当たり前のように恩恵を受けている平等の恵みの背景にある女性解放運動の歴史を忘れている人が見受けられることがあります。先輩たちの運動が社会を変え、女性の支援に前向きな政策が生まれたことを認識していない人もいます。

ジェンダー平等は、いわゆる「第三世界」で到達が必要

「信徒のためのジェンダーとパワー」

第1回 はじめに (2012年2月)

「私たちのめざすジェンダー公正—ルーテル世界連盟の取り組み」

なものと考えている女性があります。一方、ジェンダー問題をうるさく口にする、かえってリーダーとしての自分の立場が危くなる、自尊心に傷がつく、と恐れる女性もいます。ジェンダーを取り締まる警察官に過ぎないと周囲から見られることが嫌で、ジェンダーを話題にさえたがらない女性もいます。まれに、女性を敵視して女性の邪魔をする女性もいますし、反対に、ジェンダー問題の解決努力は正しいと信じる男性が、ぜひやるべきこととして全身全霊で取り組む場合もあります。男性がみな加害者・違反者・父権主義者・パワーの支配者であるとは限りません。ジェンダー問題に関して女性よりも男性の方が良き支援者となったり、女性のために声を上げる擁護者となったりという状況は、いままでに少なからずありました。

同様に、男性もいろいろなタイプの人がいます。男女同権主義者、運動の後援者、傍観者、あまり乗り気でないまましぶしぶ参加している人、女性の地位向上を敵視する人までいます。強い意志をもってジェンダー公正に取り組み、意識的に支援する男性もいれば、自分が制定したわけでもない政策や積極的にもなれない方針に従うことにプレッシャーを感じる男性もいます。指導的な地位にいる男性がジェンダーに無理解あるいは敵対心を示している場合は、ジェンダー推進政策が大幅に後退する可能性があります。



「男性は、平等を推し進めると自分たちの力・権威・特権が事実上失われてしまうと恐れるのです。これは特権的な地位にある人たちに共通する発想です。恐怖や理解の欠如があると、抵抗・保守主義・男性優越主義さえもが誘発されてしまいます。そして、こういうリアクションを恐れる私たち自身の恐れもまた、女性にとってさらに克服すべき課題となります。」(ペリ・ラソンロンドレイブ)

ジェンダー統合に積極的な男女同権主義の男性は、女性を支援する女性の味方と周囲から見られますが、一方で〈男らしいパワーを発揮することができない・管理能力が無い・弱い〉男性というレッテルをはられることがあります。また、女性が暴力や虐待のことを話題にすると、自分たち男性がまとめて非難されているように感じて、責められている自分たちの方が被害者だと勘違いしてしまう男性もいます。このような感情、役割への期待、立場のすり替えなどは、すべてよく吟味していく必要があります。

ジェンダーを理解し、正しく読み解く鍵として、感情は有益かもしれません。感情は、男性と女性の違いを説明するのによく用いられるからです。長い間、男性は理性的・合理的であると言われてきました。男性は、強い信念を持って決定を下すことが期待されています。他方、女性は感情的な存在とされ、弱く、他者に依存する生き物と思われてきました。しかし、現代ではマネジメント・トレーニング(管理者研修)のプログラムにおいて、感情は人間が本来もっているものであり、まぎれもない人間性の反応として重要視されるようになってきました。人間は、理性的でもあり感情的でもある存在として、その土台の上に知識や教養を重ねるという考え方です。決断や決定の際には「心の知能」(Emotional Intelligence)も大切だとされます。男性は、思いやりや優しさという感情をためらいなく表現することを学び始めています。夫あるいはパートナーとして妻や相手の女性をいたわり、優しい父親として子育てをするようになってきています。また、女性も指導者やリーダーとしての役割を与えられたとき、以前よりも臆することなく、罪悪感も減少しています。このような現象は喜ぶべきことで、良き模範として提示していくべきでしょう。



【さらに考えてみるための問い】

1. 自分の教会(団体)の方針に、男女どちらか一方のジェンダーに特化したものがありますか。
女性あるいは男性を特定した行動計画がありますか。
(補注:例として、牧師は男性に限られる、掃除は女性会の奉仕、司会は常に男性が行う、食事やお茶の用意は常に女性がやっている。など。)
2. さまざまなプログラムへの参加比率、リーダーの比率、議題や評価など、常にジェンダー分析がなされていますか。

「信徒のためのジェンダーとパワー」

第1回 はじめに (2012年2月)

「私たちのめざすジェンダー公正—ルーテル世界連盟の取り組み」

<以下のアンケートにお答えください。>

Q1. 該当する項目に○を付けてお答えください。

ジェンダーというカタカナ言葉は、

1. 自分で使うことがある
2. 聞いたことがあり、意味もなんとなくわかるが、自分では使ったことがない
3. 聞いたことはあるが、意味はわからない
4. 知らない

Q2. ジェンダーの観点から「教会内で気になること」を寄せてください。何でも自由にお書きください。

例：女性教会の大きな集会では男性をたて、黙っていることが多い」他

Q3. 生活していくうえで男性である、あるいは女性であることで

不自由や不利だと感じることはありませんか？何でも自由にお書きください。

例：「家庭内で妻だけがクリスチャン。夫は教会に行くことに反対はしないが、無言の圧力を感じる。

家や親族の宗教行事を大事にする務めをおこたらず、家事万端支障のない範囲で、

子どもたちも巻き込まない。妻は夫に気遣い、ひっそりと自分の信仰を守り、教会でも遠慮がち。

しかし加齢とともに、病や死の問題が現実的になってきて、自分の葬儀をどうしてほしいか、

誰とも相談できず悩んでいる。」他

ご協力ありがとうございました。

※回答後は、協力委員 FAX 096-338-0909 まで ご返送下さい。

集計後、日本福音ルーテル教会のWEB上で共有します。よろしくおねがいたします。